

## 一般廃棄物のカキ殻を再利用 用途開発を進め海外市場も開拓

1949年創業。カキ殻が持つ豊富なカルシウムやミネラルに着目し1957年よりカキ殻飼料製造販売を開始。以降カキ殻に特化した研究開発を続け、カキ殻飼料・肥料の大量生産を実現。またカキ殻そのものが持つ性質を活かした水質改善材や、飼料・餌料の生産過程での乾燥・粉末技術を活かし吸着材、白線用粉末、顔料の開発にも応用。創業以降廃棄物の再利用による環境保全・改善に尽力。現在では加工されたホタテ殻を加工し、カキの養殖に用いられるホタテ盤と呼ばれるカキ採苗用のホタテ貝殻の大量生産にも力を入れている。

所在地 広島県広島市中区十日市町1-4-31  
電話/FAX 082-292-4111/082-291-4101  
URL <https://hiroshima-maruei.com/>  
代表者 代表取締役社長 立木 陽子

設立 1952年  
資本金 1,000万円  
従業員数 68人



### カキ殻の用途拡大を進め需要を開拓、海外市場にも進出

従来の飼料・肥料に比べ、同社製品はカキ殻が持つ豊富なカルシウムやミネラルが特徴的。飼料は牛、豚、鶏など幅広く利用され、肥料は水酸化マグネシウムを含んだ製品も開発。吸着材としての水質改善材、白線用粉末、顔料、さらには「カルチ」と呼ばれるカキ採苗用のホタテ貝殻も製品化している。これらの用途拡大により需要獲得に成功し、海外からの引合いを受け、現在までベトナム、中国、台湾への輸出を実施。足元ではアフリカからの引合いもあり、今後の海外展開に備えている。



サンライムの出荷

### 廃棄物に着目した循環型社会の実現

原料となるカキ殻は、カキをむき身として加工した後に一般廃棄物となるため、通常であると処分する過程での運搬、焼却に費用がかさむ。そのため処分に悩む加工業者も多かった。地場の広島でもカキは宮島をはじめとして重要な観光資源を担っている一方、毎年大量にカキ殻が発生するが、こうしたカキ殻を集積し再利用することにより循環型社会の実現に貢献している。2021年度に70周年を迎えることとなるが、引き続き地域資源の活用に取り組む所存である。



再利用するカキ殻

### 手作業から自動化による大量生産へ

大量生産に向けた省人力化に寄与する設備投資を積極的に推進している。近年に取り組んだカキの養殖棚に用いられるホタテ盤は、材料となるホタテ殻を手作業で穴を開ける等大量生産が難しい商品であった。そこで設備投資により最新ラインを導入、大量のホタテ殻を一つひとつロボットでラインに乗せレーザーで穴を開ける工法を採用した。手作業では数十人の工員が24時間体制で行っていた作業を、数人の工員で8時間程度にまで短縮することができている。



自動化の推進